

平成 21年 4月 30日現在

研究種目：基盤研究 (B)
研究期間：2006～2010
課題番号：18330168
研究課題名 (和文) 近代日本の植民地経験とアイデンティティ形成に関する比較教育文化史的研究
研究課題名 (英文) Comparative Study on the Relationship between Colonial Experience of Modern Japan and Identity Formation through Historical Approach on Education
研究代表者
駒込 武 (KOMAGOME TAKESHI)
京都大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号：80221977

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：アイヌ、沖縄、奄美大島、台湾、朝鮮、植民地、教育、アイデンティティ

1. 研究計画の概要

(1) 研究の目的

本研究の目的は、①学校教育の役割に着目しながら植民地経験とアイデンティティ形成をめぐる問題を比較史的に考察するとともに、②近代日本の植民地主義に関して世界的視野から比較研究を展開するための人的ネットワークを構築し、③資料集の編集などを通じて多民族・多文化的状況への認識・感受性を広く社会的に共有していくことである。

本研究では、近代日本の植民地（「内国植民地」とされた北海道や沖縄を含めて考える）において「アイヌ」「沖縄人」「台湾人」「朝鮮人」というアイデンティティがどのように成立し、変容したのかを解明する。ここで、アイデンティティの成立に着目する理由は、政治的・経済的・社会的な力関係が「民族」や「文化」の問題とみなされるプロセス自体を検討する必要があると考えるためである。

植民地主義的な権力関係において学校教育は「民族的」な「文化」の問題に翻訳する装置としての役割を果たしたが、社会生活一般においては「文化」の問題には翻訳しきれない、多様な「植民地経験」——それは支配者にかかわる経験であると同時に、被支配者にかかわる経験でもある——が存在した。また、学校教育の中でも、日本語・日本文化という観念の純粋性を維持しようとするからこそ、そこに内在する複数性が顕在化することもある。本研究では、「植民地経験」が、「民族的」な「文化」の優劣に還元できない経験を包含するものであったことに着目しつつ、

今日の多民族・多文化的な状況の中に植民地主義的な権力関係がどのように刻み込まれているのかということを知ること、これを解明することを目的とする。

(2) 研究の内容と方法

本研究では、台湾史を専攻する研究代表者のほか、沖縄史専攻の富山一郎および鳥山淳、朝鮮史専攻の板垣竜太、アイヌ史専攻の小川正人により「コア・グループ」を形成して相互に報告・討論を重ねると同時に、それぞれが従来の研究フィールドで蓄積してきた知見や人的ネットワークの共有に努める。具体的には、現地をともに訪れ、資料調査を行うとともに、人的ネットワークを相互に接続していくことを企図する。また、大規模な「国際会議」の開催という手法とは対照的に、それぞれの地域の「いま」が抱える問題を切実に意識しながら、新しい歴史認識を生みだそうとしている若手研究者と少人数で時間をかけて討論することを重視する。それぞれの地域の「いま」が抱える状況への問題意識を含めてフィールドにおける「土地勘」を欠いては、比較研究も表層的なものとならざるをえないからである。

本研究の研究成果は、詳細な解説を付した資料集として公刊することを考えている。資料集の作成を目指すのは、植民地主義をめぐる問題を概括的に整理し「理解」するのではなく、「いま」に連なる開かれた問いとして共有することが重要と考えるからである。また、さまざまな地域における研究者ネットワークを相互につないでいくために、WEB上にデータを蓄積しながら相互に討論を展開するためのスペースを設ける。

2. 研究の進捗状況

(1) 研究会の開催状況

本研究では2006(平成18)年度から2008(平成20)年度にかけて下記のように研究会を開催してきた。

2006年度には京都で2回の研究会を開いたほか、北海道、奄美大島でも研究会を行い、2007年度には京都で5回の研究会を開いたほか、イギリスで研究会を行い、2008年度には京都で5回の研究会を開いたほか北海道、奄美大島・鹿児島で研究会を開いた。

(2) 奄美大島の重要性への着目

当初の研究計画には含まれていなかった奄美大島が研究会の開催地に含まれているのは、近世における植民地支配と近代の植民地支配の相違を考える上でも、鹿児島から台湾へといたる「琉球弧」における人の移動という点でも奄美諸島が重要な位置を占めていると判断したためである。また、北海道と奄美大島を二度にわたって訪れているのは、現地を繰り返し訪れて議論を重ねることにより議論の密度と深度を高めることができると判断したためである。

2008年度の奄美大島における研究会では現地の郷土史家ばかりでなく、北海道在住のアイヌ言語文化研究者である本田優子にも参加してもらい、日本の「北方」をめぐる問いと、「南方」をめぐる問いをリンクさせて考える場とした。この研究会は大きな反響を呼び、現地で刊行されている『南海日日新聞』(2009年1月13日)で報道された。

なお、旅費の多くを奄美大島訪問にあてたこともあって当初予定していた台湾・韓国訪問は実現できていないが、京都で開催する研究会に台湾史研究者や朝鮮史研究者を招くことにより台湾・朝鮮をめぐる議論を深めているほか、台湾や韓国で刊行される雑誌への寄稿、著書の韓国語版の刊行などを通じて現地の研究者との対話を継続している。

(3) 英語圏における研究との対話

2007年度においては研究会のコアメンバーがイギリスを訪問し、シェフィールド大学のRichard Siddle教授や、グラスゴー大学のSatnam Virdee教授とともに研究会を開催した。これらの研究会においては、英語圏で用いられているRacismという概念が日本をめぐる植民地支配の経験を考察する上でも有効であることが確かめられた。ただし、Racismという概念自体が多義的であり、日本におけるRacismに固有の問題を明確化するにはさらに議論を積み重ねる必要がある。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に推移している。

(理由)

近代日本の植民地経験とアイデンティティ形成に関する資料集の編纂が本計画の目的だが、現時点ではコアメンバーが各1巻の資料集を編集することとして各巻の編集方針を固め、出版に向けての準備も進捗しつつある。今後さらに資料の選択、解説の執筆のあり方についての意見交換を行っていく予定である。なお、ホームページの作成についてはコアメンバーで研究会の蓄積を共有するための暫定的なサイトはたちあげているものの、まだ一般公開にはいたっていない。

4. 今後の研究の推進方策

繰り返し現地を訪問することにより議論の深化という観点から、今年度中に再度、奄美大島で総括的な討論の場を持ちたいと考えている。また、英語圏における研究者との対話という点ではハーバード大学における研究会の開催を予定している。ただし、資金的に困難と判明した場合には、若干の変更を行う可能性がある。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計8件)

[学会発表] (計4件)

[図書] (計16件)

① 駒込武「台湾における未完の脱植民地化」金富子・中野敏男編『歴史と責任 「慰安婦」問題と一九九〇年代』青弓社、2008年、152-162頁

② 板垣竜太『朝鮮近代の歴史民族誌—慶北尚州の植民地経験』明石書店、2008年、414頁

③ 富山一郎「ユートピアたち」石塚道子・田沼幸子・富山一郎編『ポスト・ユートピアの人類学』人文書院、2008年、341-376頁。

④ 駒込武『植民地帝国日本の文化統合』(韓国語版)歴史批評社、2008年、540頁

⑤ 駒込武「帝国と「文明の理想」」駒込武・橋本伸也編『帝国と学校』昭和堂、2007年、1-32頁。